

団長ちゃんの行方が  
分からなくなつて  
一か月以上が経過し…

私はアウギステ列島の  
リゾート施設で  
団長ちゃんの姿を見た  
知らせを受け…

いても立つてもいられず  
そのリゾート施設に  
潜入することにした

女性、水着着用限定で  
特別会員のみに  
入れるという部屋…

表向きは普通の  
施設だったのだけど…

立ち入り禁止の  
通路の先…  
そしてこの警備の数  
間違いないわ  
何かある…

団長ちゃんを  
見たという  
情報の場所に…

おそらく何かの薬品…  
でも…っ!!

次第に体が…  
お腹の下が…  
熱くなつてきてる

奥から漂う  
甘い香り…

その考えが  
危険信号を  
麻痺させた…  
そして—

この奥に  
団長ちゃんが  
いるかもしれない



その中心に…

それらが交わった  
噎せ返るほどの  
獣臭

子種…

汗と唾液

雄と雌…

(団長ちゃん)  
彼女はいた



「いいじゃねえか  
マグロ女犯すより  
抵抗して来た女を  
ひん剥いていく方がよ」

「今となっては  
薬でもとにも動けずに  
メスイキするだけの女だ」

「どうあがいても  
俺たちに勝てねえよ」

「おつきまで新品だった  
水着がもうポロポロに  
なったじゃねえか」

「ちっとは加減しろよ」

「しょうがねえだろ  
いきなり抵抗して  
きたんだからよ」



そこには…

目を疑うような  
光景が広がっていた…

「オラ、赤ちゃんに たっぷり栄養 くれてやる」

「受け取れや…!!」

「とてろで、そんなに 激しく犯して中の胎児は 大丈夫なのか？」

赤…ちゃん…?

「大丈夫だろ」

何を…言って…

「何せ、孕ん中に いるのは魔物の ガキだからな」

「以前こいつに逃げられた スポンサー様が 大変お怒りでなあ」

「流れたガキの恨みに 研究中の魔物の種を 魔法で着床させたのよ」

「魔物の胎児は母体 の魔力を吸収して 育つらしいんだが」

「どうやら精液に 含まれる魔力も 吸収するんだとよ」

「魔物のガキか なら遠慮はいらねえな！」

「そうさうことだ」

「おい、もう一周 輪姦すぞ!!」

「マシユぶ壊れる くらいザ〜メン 喰わせてやれ」

そこで私の 何かがキレた

自身の体の 異常すら忘れ…

怒りのまま 抜刀し…

飛び掛かった…

はずだった…のに…

「さすがドララ  
すげえ締め付けた」

「もう出ちま  
うぞうぞう」

「いやッ！  
出さないでえッ」

「うるせえ!!  
子袋にたつぷり  
出してやる!!」

「いや、それだはッ!!」

「ださないでえッ」

私は男たちに  
犯されていた…

どうしてこんなこと  
なってしまったのか…

答えは簡単だった…





「やっぱりあのジータって女を使うのは正解だな」

「こうやって餌ばら撒いてたら女の方から勝手に来てくれるんだからな」

『オラどうした!! このきまでの威勢はよー!!』

「く……どう……して……」  
「気ついた時には体は鉛のように重くなっていた」



そう……

施設に充滿していたあの甘い匂い……



『この施設に充滿してる匂い』

へへ……たっぷり出してやったぜ……

「ああ……また……」  
「臍内に……」

「まさか女にしか効かない神経媚薬だと思わないうらうからなあ」



私の操は……

「じゃ、いただきまーす」

「やめてっ!! やめなさいっ!!」

奪われた……



『回ほどにもねえ』

嘲笑われ……

「おい、新しい肉便器が来たぞ、他の奴らも呼んで来い!!」



そして体が火照り力がうまく出せなくなった私は

大した抵抗もできないままあっさりと敗北した……

「がはっ!!」



「オラオラどうした!? ドラフの姉ちゃん!!」

「このままじゃまた 出されちゃうぞ!!」

「あっああっ!! このっくっ...卑怯...者おっ...っ!!」

「クッ...クッ...クッ...」

「あほか!! 畏にかかると方が 悪いんだよ この雌ドラフが!!」

「必ず...っ...お前たちをっ たおして...っかあ...ああっ!!」

「この回は...っ...もねえ...」

「俺のチンポを 涎出しながら 銜えてるじゃねえか!!」

「俺のザーメンが そんなに欲しいのか?」

「違...っ...これ...っ...はっ...ああっ!!」



「たっぶり受け取れや!!」

灼熱のマグマの ように熱い子種が 私の無防備な 子宮内を焼いてくる...

どこの誰ともわからない 男の子種で孕まされる...

「へっ... そんなにおねだりされちゃ 仕方がねえ!!」

「やー出さないでっ!!」

「これ以上出されたら 赤ちゃんがっ!!」

その恐怖に雌の悲鳴を あげるしかなかった